報告

母子健康手帳の積極的活用にむけて

―保護者への質問紙調査から―

青木美菜子1) 粕谷 和美1) 藤巻わかえ2)

[論文要旨]

母子健康手帳は子どもの健康記録として重要であるが、親子の絆を実感する手帳でもある。保護者に母子健康手帳の利用状況と評価に関して質問紙調査を行った結果、健康診査時の医師記録や「保護者の記録」欄の質問へのチェックといった受動的な利用が多く、成長曲線や子どもの様子の記載、掲載情報の活用といった積極的な利用は少なかった。また使いやすいと回答した人は約半数にとどまった。内容的には子どもの健康に関する情報への要望が高かった。利用状況と使い心地の総合評価に影響する因子の解析結果から、積極的な手帳の利用を促すためには、携帯しやすいサイズで内容のわかりやすさと情報の充実をはかることが必要であると考えられた。

Key words:母子健康手帳,積極的活用,質問紙調査

I. 目 的

母子手帳は昭和24年に日本で誕生した。当時は妊産婦死亡や乳児死亡が多かったことから母子の医学的な健康チェックの役割を担った。昭和41年には母子保健法の成立に伴い母子健康手帳と名称を変え、時代の流れとともに母親たちの自主的な記録欄が増え、母と子の健康記録としての性格をもつようになった。このような健康記録は親にとって大切なものである。一方子どもの立場からみれば、幼い頃に親がつけてくれた自分自身の記録は、親からの愛情を実感できる最大の宝物である。現代の核家族化や少子化をうけて今後はより一層「親子の絆の証」としての役割が求められると考える。その役割を果たすためには、保護者が積極的に活用できるような母子健康手帳である必要がある。

現在の母子健康手帳は時代とともに改正され 素晴らしい情報がもりこまれている。しかしわ れわれがみる限り難しい表現が含まれているこ とから、母子健康手帳がどの程度に活用されて いるのか興味がもたれた。母子健康手帳が積極 的に利用されるためには利用者ニーズが反映さ れるべきであるが、利用者ニーズに関する報告 は極めて少ない1.20。このうち平成13年の藤本 らの報告は保護者1万人余におよぶ大規模な質 問紙調査であるが、利用率が高い反面使いやす いと答えている保護者は半数程度であることが 指摘されていた1)。その後、平成14年には母子 健康手帳の改定がなされた。それにより手帳の 活用が促進されたかどうかの評価が必要であ る。また、時代に応じて変化する利用者ニーズ について経時的な調査を行い、さらなる改善に むけての課題を明らかにしていく必要もある。

[2103]

受付 09.1.7

採用 09.6.24

Attempt to Optimize the Usage of the Maternal and Child Health Handbook Using a

Questionnaire Survey of Guardians of Preschool Children

Minako Aoki, Kazumi Kasuya, Wakae Fujimaki

- 1) 女子栄養大学栄養学部保健栄養学科(学生)
- 2) 女子栄養大学栄養学部人間医科学研究室(医師)

別刷請求先: 藤巻わかえ 女子栄養大学人間医科学研究室 〒350-0288 埼玉県坂戸市千代田3-9-21 Tel/Fax: 049-283-2127

そのために今回の研究では、母子健康手帳の利用状況や使い心地の評価、また母子健康手帳への要望を質問紙調査した。そして、手帳の利用状況や使いやすさに対する影響因子の順位づけを行い、母子健康手帳の積極的活用にむけての課題を提示した。

Ⅱ. 対象と方法

1. 質問紙調査

平成20年3月~4月に質問紙調査を実施し た。対象は保育園児の保護者で、A保育園(埼 玉県A市) 0~3歳児の保護者55名、B保育園 (東京都B区) 0~5歳児の保護者137名。C保 育園(東京都C区)0~5歳児の保護者86名. D保育園(東京都D区)0~5歳児の保護者47 名. 合計325名であった。質問紙の内容は、保 護者や子どもの属性,母子健康手帳の利用状況, 使用している手帳の装丁, 手帳の使い心地, 手 帳への要望に関する質問と、自由な意見の記述 から構成される。質問紙調査の実施に際しては 各園の承諾を得たうえで、各園に配布を依頼し、 質問紙は園から保護者へ配布された。回答形式 は自記式とし、回収は当施設へ直接郵送、ある いは保育園で回収の2つの方法を自由選択とし た。インフォームドコンセントに関しては、質 問紙に説明書を添付し自由意志による返送とす ることで同意を得られたものとした。また個人 情報保護のために無記名とした。

2. 集計と解析

集計はエクセルソフトを使用した。質問紙調査を依頼した保育園の地域は異なるが、回収率や回答の傾向に有意な差を認めなかったので、すべての保育園を一括して集計解析した。母子健康手帳の利用状況と使い心地の総合評価に影響を与えている要因を調べるためには、統計処理ソフト Categorical data analysis program (CATDAP, www.ism.ac.jp) を用いて分割表データにおける変数選択を行った^{3,4)}。これにより、「母子健康手帳の利用状況と使い心地の総合評価」を目的変数とする場合に、「影響を与えている要因」として選んだ質問票の複数の説明変数の中から、最適な説明変数を選ぶことができる。説明変数の選択には情報量基準で

ある Akaike's Information Criterion (AIC)^{3,4)} が用いられ、AIC が小さいほど良い説明変数であるとされる。AIC による説明変数評価は、目的変数と選択された個々の説明変数による分割表において目的変数と説明変数の関係が独立なのか従属なのかを評価するもので、目的変数と従属変数の相関関係を評価することと同等である。複数の説明変数について目的変数に対する影響を詳細に検討できる点で、本研究の目的に最も適した解析手法であるといえる。

Ⅲ. 結果

1. 質問紙回収率と有効回答率

質問紙を配布した325名のうち163名から回答が得られ、回収率は50.2%であった。このうち有効回答率は82.8%で135名であり、統計処理はこの135名について行った。自由記述の回答についての検討は、回収できた163名全員について行った。

2. 回答者の属性

表1に結果を示す。母子健康手帳を所持している保護者の年齢は30歳代が72%と最も多かった。子どもの人数は2人が半数を占め、1世帯あたり平均1.8人であった。本調査では、母子健康手帳の利用状況については、末子の手帳について回答を求めた。末子の年齢は、2.4±1.7歳(平均年齢±標準偏差)であり、0~2歳児が56%を占めていた。

3. 母子健康手帳の利用状況

表1に結果を示す。病院への持参状況は、「必ず持参する」と「時々持参する」を合わせて97%であり良好であったが、中には、健康診査時・予防接種時は必ず持参するが、病院への受診時は持参しないというコメントもあった。家庭での閲覧頻度は、「2~3か月に大体1回」と「半年に大体1回」が多く、少なくとも半年に1回以上見る人が70%以上を占めた。その一方で、「年に1回」や「ほとんど見ない」という人が26%であった。記載状況は、健康診査記録が最も多く、次いで各月齢の健康診査のページにある「保護者の記録」へのチェックであり、それぞれ半数を超えた。しかし、健康診査以外

表1 質問紙調查結果 (回答率)

子どもの人数(質問1) 1.8±0.8人(1~4人) 末子の年齢(質問1) 2.4±1.7歳 (0~6歳) 母子健康手帳を所持している人の年齢(質問2)

20歳代(12%), 30歳代(72%), 40歳代(16%)

健診時, 受診時, 予防接種時に持参するか (質問3)

必ず持参(63%), ときどき持参(34%), 持参しない(3%)

母子健康手帳を閲覧する頻度(質問4)

1週間に1回(3%), 1か月に1回(20%) 2~3か月に1回(26%)、半年に1回(25%) 1年に1回(11%), ほとんど見ない(15%)

母子健康手帳の記載状況 (質問5,複数回答)

健診記録はほぼ毎回記録されている(66%) 「保護者の記録」の質問に答えている(56%) 成長曲線グラフを書き入れている(42%) 健診以外に身長や体重を書き入れている(34%) 折にふれて運動や発達の様子を書いている(16%) ほとんど何も書いていない(12%)

よく参考にしている記事があるか(質問6)

ある(44%). ない(56%)

使用している母子手帳の装丁について (質問7)

大きさ:葉書版(90%)、その他(10%)

- ジ 数:90±10ページ

色 遣 い:白黒(20%), 2色刷(32%), カラー(48%) 表 現 手 段: イラストや図表がはいっている(73%) ほぼ文章だけである(22%)

母子手帳の使い心地について (質問8)

大き: 大きすぎ(1%)、丁度よい(95%)、小さすぎ(4%) さ:厚すぎ(10%),丁度よい(89%),薄すぎ(1%) 言葉・表現:わかりやすい(90%), 難しい(10%)

表 現 手 段: 丁度よい(71%)

イラストや図がもっと多いほうが良い(26%) 文章がもっと多いほうが良い(3%)

色 遣 い:良い(86%). 悪い(14%)

情報量:多すぎ(7%),丁度よい(75%),少なすぎ(15%)

総合評価:使いやすい(56%)

どちらともいえない(40%) 使いにくい(4%)

(n = 135)

で身長・体重を測定したデータや成長曲線を書 き入れている人は半数に満たず、折にふれて子 どもの運動や発達の様子を書き入れている人は 16%と少なく、ほとんど何も書き入れていない 人もいた。よく参考にする情報記事の有無につ いては、「ある」が半数に満たなかった。「ある」 と回答した人が参考にしている項目は、「予防 接種欄」が36%、「身長と体重あるいは成長曲線」 が39%とほぼ同等で、全体の75%を占めた。

母子健康手帳の利用状況は複数の項目に反映 されるため、すべてを包括した数値指標として

表 2 母子健康手帳の利用状況をスコア化した時の基準

項目	選択肢		スコア
持参状況	必ず		2
	ときどき		1
	いいえ		0
閲覧頻度	1か月に1回以上		2
	半年に1回以上		1
	1年に1回以下		0
記載状況		回答項目数	
	健診記録	5	3
	保護者の記録	4	
	成長曲線	3	2
	健診以外の身長体重	2	
	自由記載	1	1
	ほぼ未記入		0
よく参考にして いる情報の有無	あり		1
	なし		0

記載状況は複数回答である。「ほぼ未記入」の人はスコア 0とした。その他の5項目については、いずれか1項目を記 載している人をスコア1,2~3項目記載している人をスコ ア2,4~5項目記載している人をスコア3とした。

スコア化を試みた。具体的には、1)健康診査 や予防接種や受診の際に病院へ持参するかどう か,2) 家庭での閲覧頻度,3) 記載状況,4) よく参考にする情報記事の有無、の4項目の回 答から表2の基準を用いてスコアを算出した。 スコアは0~8点で、スコアが高いほど利用頻 度が高いことを示す。スコア別の人数の割合を 図1に示す。スコア3~7点がほぼ同等で多く. スコア2点以下と8点は少なかった。スコア別 の利用状況の詳細を図2に示す。スコア5点で は、60%の人が病院へ手帳を必ず持参するが閲 覧は半年に1回以下で、過半数の人が記載して いたのは健康診査記録と「保護者の記録」欄の みであった。ところがスコア6点になると、半 数以上の人が成長曲線を描き情報を活用するな ど、積極的な利用が増加した。さらに7点では、 すべての人が病院へは必ず手帳を持参し、90% の人が2~3か月に1回以上閲覧し、70%の人 が健康診査以外にも身長体重を記録し、半数近 くが子どもの様子を記載していた。

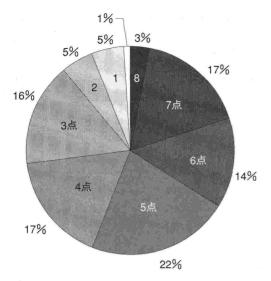


図1 母子健康手帳の利用状況のスコア別頻度表2のスコア化の基準にしたがってスコアを算出し、スコア別の人数の割合を示した(n=135)。スコアは0~8点であり、スコアが高いほど利用状況が高いことを示す。

4. 母子健康手帳の装丁

表1に結果を示す。現在利用者が使用している母子健康手帳の装丁は葉書版で90ページ前後であり、ほぼ一律であった。カラー刷りでイラストや図表がはいっているものが多かったが、白黒でほぼ文章だけというものも20%程度あった。

5. 母子健康手帳の評価

母子健康手帳の装丁や内容についての満足度を表1に示す。サイズ・厚さ・言葉や表現のわかりやすさ・色遣いに関しては80%以上の人が満足していた。しかし、イラストと文章の割合について満足している人は71%と減少し、「イラストや図表がもっと多いほうが良い」とする人が目立った。また情報量についても、「丁度よい」と回答した人は75%で、「少なすぎる」が15%だった。

使い心地の総合評価は、「使いやすい」と回答した人が56%にとどまり、このうちの15%の

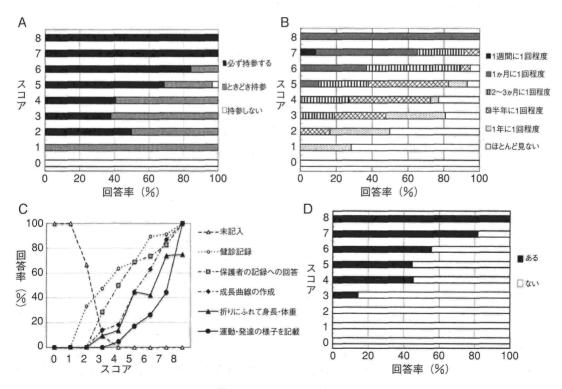


図2 スコア別の利用状況

母子健康手帳の利用状況についてスコア別に人数の割合を示した(n=135)。A. 持参状況, B. 閲覧頻度, C. 記載状況(複数解答)、D. 参考にする情報の有無。

人は、「他の母子健康手帳を見たことがなく比較できないので、イメージがわかず評価できない」といった消極的コメントをしていた。一方、「どちらともいえない」が40%で「使いにくい」と回答する人もいて、総合評価は満足度の割には低かった。

6. 利用状況と総合評価に影響する因子

利用状況を示すスコアを目的変数として、その他の項目のどれが利用状況に影響しているのかを、AICの値から検討した。スコア基準の妥当性は、スコア化に用いた表2の各項目およびスコアを目的変数として、それぞれの場合でAICによる変数選択を行い、上位変数が同一傾向を示すことにより確認した。

図3に、影響力が強い順に10項目を示す。AICの値が小さいほど影響力が強いことを表す。図3Aに示すように、利用状況に一番大きく影響していたのは子どもの年齢で、子どもの年齢が低いほど利用頻度が高かった。その他の影響因子としては、手帳のサイズや使いやすいかどうかの総合評価が影響しており、携帯するのに手頃なサイズであることや使い心地の良さが、利用状況を高めていた。

次に. 総合評価に影響している因子を検討し

た。図3Bに示すように、総合評価に一番大き く影響していたのは情報量、次いで色遣いや言 葉・表現のわかりやすさ、イラストの使用といっ た使い心地で、適切な情報量と使い心地の良さ が総合評価を高めていた。

7. 母子健康手帳への要望

新しい母子健康手帳を作成する場合にどの ような情報への要望が高いのかを検討した。 図4Aは80%以上の人から要望があった項目で あるが、「事故や病気の応急処置」、「予防接種 の種類やスケジュール」、「子どもの発育や健康 チェック」、「離乳食の種類と進め方」、「胎児の 発達に悪影響をおよぼすこと」、「病院情報」で あり、子どもの健康管理や発育に関することが 主であった。逆に、「母体のスキンケア・胸の 手入れ・乳首の管理」、「分娩時の入院のタイミ ング」といった母体に関する項目、あるいは、「教 育サポート情報や育児支援情報」といった急を 要さない情報については、60%以下の要望率で あった。われわれは栄養管理を推進する立場で あることから子どもの食事に関する項目に注目 したが、「離乳食」については83%と要望が高 かったが、「栄養で注意すべきこと」は73%、「お やつの意義や与え方」は66%、「母乳と調整粉

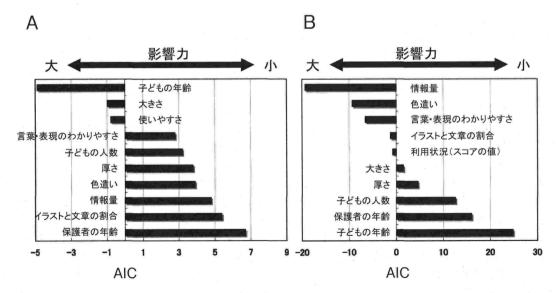


図3 母子健康手帳の利用状況と使い心地の総合評価に影響する因子

分割表データにおける変数選択を行い、AIC を算出した(n=135)。AIC の値が小さくなるほど目的変数に対する影響力が強いことを示す。A. 利用状況に影響する項目、B. 使い心地の総合評価に影響する項目。

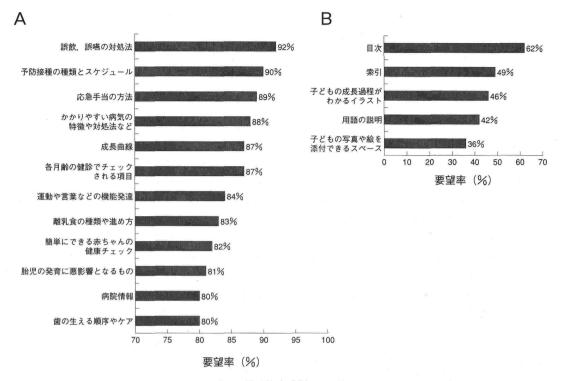


図4 母子健康手帳への要望

複数回答による結果である。A. 情報に対する要望事項と要望率、B. 母子健康手帳を使いやすくする要望事項と要望率。

乳の違い」は51%と、比較的低い要望率であった。子どもではまた、家庭内事故が多いが、「応急手当」、特に、家庭内で最も多い「誤飲や誤嚥の対処法」に92%の要望があった一方で、「事故がよくみられる器具の種類と注意」や「事故がよくおきる家庭内の場所や時間帯の注意」といった事故予防に関する項目に対しては関心が低く、それぞれ69%、57%であった。

母子健康手帳を使いやすくするための要望事項では、特に要望の高いものはなく、60%を超えたものは「目次をいれること」だけであった。ただし回答者の自由記載では、調査項目にはなかった項目がいくつかみられた。最も多かったのは、予防接種の記録紙・妊娠中のエコー写真・育児記録の記載に要するスペースが十分に欲しいという内容で、37%の人から要望があった。情報量に関する要望は携帯のしやすさとともに考えている人が多く、最低限の情報量を希望する人(20%)の主な理由は携帯のしやすさにあった。逆に情報がもっと欲しいという人(20%)

では、別冊の提案があった。

Ⅳ. 考 察

本研究では、母子健康手帳の利用者集団として、保育園児の保護者を選択した。したがって、保育や家庭環境・地域が異なる集団や社会情勢の変化によって、結果が異なってくる可能性はある。地域毎に調査を行えば、市町村が自由に作成できる手帳の後半部分で地域特性に即した情報掲載を期待できるので、今後の検討課題としたい。

次に解析対象者数について、135名と比較的 少ないので本研究の限界はあるが、異なる4つ の保育園で同傾向の結果を示し、藤本らの報 告¹⁾とも類似していたことから、ある程度現状 を反映していると考える。

手帳の利用状況に関しては、スコア5点までの受動的な利用が2/3を占めた。藤本らの報告では¹⁾、医療機関へ必ず持参する人は69%、情報が記載されている母子健康手帳の後半部分を

全部読んだ人は47%で一部読んだ人は52%である。また健康診査記録と「保護者の記録」と成長曲線についてはほぼ80%以上の人が記録していたという。藤本らの報告に比較すると、われわれの結果はむしろ利用が低下している印象を受ける。しかし彼らの報告は1歳6か月児健康診査時の調査であるのに対して、われわれは2.4±1.7歳の調査であり、母子健康手帳の利用が子どもの年齢とともに下降することを考慮すると、実態は当時とあまり変わりがないのかもしれない。少なくとも活用があまり進んではいない現状が推察される。

母子健康手帳の装丁や内容については、満足度の割に使いやすいかどうかの総合評価は低かった。藤本らの報告でも、「とても使いやすい」と「少し使いやすい」を合わせて56%であり¹⁾、われわれの結果は藤本らの報告と一致しており、これについてもあまり改善はなされていない状況がうかがえる。

利用状況や使いやすさを向上させるために は、何がそれらに影響を与えているのかを解析 することが重要である。解析の結果、利用状況 には子どもの年齢が一番影響していたが、この ことは1歳までは健康診査の回数が多く、また、 健康上の心配が多いことからも当然であると考 えられる。他には手帳の大きさや使いやすさが あがっていた。大きさは持ち運びのしやすさと いう点で重要であるが、葉書サイズでほとんど の人が満足していたので、問題ないと考えられ る。藤本らの報告でも、大きくして欲しいとい う要望は6%にすぎなかった10。使いやすさに 一番影響していたのは情報量であった。情報量 に満足していた人が低めで実際に活用されてい る情報の内容が限られていたこと, 一方で子ど もの健康管理や発育に関する情報への要望が非 常に高かったことは、情報提供のあり方に改善 の余地があることを示している。平成14年の母 子健康手帳の改正で、妊娠中の薬・喫煙・飲酒 の影響や葉酸摂取の必要性などの情報の充実が はかられたところであるが50. 改正以前の藤本 らの報告1)と改正後のわれわれの結果では、利 用者が参考にしている情報内容に差がなく. ま た、要望も変わっていなかった。このことから、 利用者のニーズにあった情報の充実をさらには かる必要性があると考える。情報提供にあたっては、満足度が低調で総合評価への影響が大きかった色遣いや言葉・表現のわかりやすさ、イラストの使用に留意する必要がある。

以上より、母子健康手帳の積極的な活用を促すためには、1)携帯に便利な手頃なサイズ、2)利用者のニーズに合う情報の充実、3)イラストや色遣いを工夫したわかりやすい内容、の3点を目指す必要があると考える。この中で、手帳のサイズと厚さを変えずに情報の充実をはかることは難しく、利用者もそれを承知していて携帯のしやすさと情報量を天秤にかけているようである。解決方法としては自由記載にも提案があったが、二部構成として、一冊を子どもの成長記録専用で持ち運び用、そしてもう一冊は情報誌として家での保管用とすることも考えられる。

母子健康手帳は、小児期を一貫して記録管理できる優れた手帳であるとともに、親子の絆を確認できる手帳でもある。その観点から、小林らが取り組んだような就学後も活用できるような手帳は注目されるが^{2.5}、既存の手帳においても受動的な活用にとどまらず積極的な活用ができるようになることを期待する。

謝辞

稿を終えるにあたり、質問紙調査にご協力いただきました保育園関係者と保護者の方々、統計処理についてご指導いただきました東京女子医科大学総合研究部 清水 悟先生、母子健康手帳についてご指導いただきました女子栄養大学 小林正子先生に深謝いたします。

文 献

- 藤本眞一,中村安秀,池田真由美,他.母子健康手帳の利用状況調査.日本公衆衛生学会誌 2001:48:486-494.
- 2) 小林正子. 母子健康手帳のさらなる活用に関する研究. 平成14年度厚生労働科学研究(子ども家庭総合研究事業)「乳幼児から思春期まで一貫した子どもの健康管理のための母子健康手帳の活用に関する研究」報告書(第5/11) 2003:9-75.
 - 坂元慶行,石黒真木夫,北川源四郎.情報量統 計学.東京:共立出版,1983.

- 4) 坂元慶行. 応用統計数学シリーズ「カテゴリカルデータのモデル分析」. 東京: 共立出版, 1985.
- 5) 内海裕美. 母子健康手帳の改正について. チャイルドヘルス 2004:7:790-792.
- 6) 小林正子. 3 歳以降の子どもの発育と母子健康手帳の活用. 子どもと発育発達 2004;1:412-413.

(Summary)

The maternal and child health (MCH) handbook is an important item for documenting the growth record of children, but it also has another role of creating a bond between parent and child. To investigate the current usage of the MCH handbook and to improve its quality, we conducted a questionnaire survey of guardians with small children. Many of the guardians used the MCH handbook when attending for health check-ups. Checking of

developmental milestones at various time points was frequent, but recording of growth curves or observations of children was done less often. Information in the MCH handbook was not used frequently. In general, guardians used the handbook passively rather than actively, and only about half regarded the handbook as user-friendly. To improve the quality of the MCH handbook, guardians requested more information on child health, such as first aid, the timing of immunization, or weaning foods. On the basis of categorical data analysis of the results, a "user-friendly MCH handbook" was considered to incorporate the following points: an appropriate size, easy-to-understand expressions, and a higher content of information relevant to guardians.

(Key words)

maternal and child health handbook, optimal usage, questionnaire survey

会合案内

「小児科学の未来」12月フィレンツェ開催 Excellence in Paediatrics

Stay ahead in children's medicine!

【会期】2009年12月3日~6日

【会 場】 イタリア・フィレンツェ Firenze Fiera Fortezza da Basso (website:www.firenzefiera.it) 【プログラム】

主要テーマ: Infectious Diseases, Allergy-Immunology-Pulmonology, Neurology-Social and Environmental paediatrics, Endocrinology and Growth, Gastroenterology, Nephrology and Urology, Dermatology, Adolescence Medicine, Cardiology, Surgery and Transplantation, Haematology and Oncology, Rheumatology, Genetics, Neonatology

これらのテーマに基づき、70以上の講演・座談会、討論、ケーススタディー、ワークショップなど幅広い形態でのセッションが予定されています。また、12月3日には、小児栄養学に焦点をあてた、Evidence Based Medicine and Child Nutritionが開催されます。小児科医のみならず、一般開業医やホームドクター、その他看護師の皆様にとっても小児科学に関する最新の研究に触れる機会となることでしょう。

【言語】 英語

www.excellence-in-paediatrics.org ~ web サイトにアクセスください 皆様の参加をお待ちしています~